



妙たえ の光ひかり

通刊35号 復刊10号

1993年10月30日(季刊)

角田山妙光寺発行

新潟県西蒲原郡巻町

角田浜

〒953 ☎0256-77-2025

ヤギの草取り番

昔はヤギを飼っていた農家が多く、この乳を飲んで育ったという人の話をよく聞く。それが今ではすっかり珍しい動物になった。心ない人がいるもので、山に捨てられていたのを誰かが連れてきてもう三年になる。境内の雑草を食べてくれるので役に立つが、うっかりしていると庭木の葉まで丸坊主にされてしまう。

妙光寺にはこの他にアヒル、ウサギ、犬が各二頭、池に鯉と鮒が数十匹。この夏にはどこからともなくチャボが一羽、勝手に入ってきて中庭に居ついてしまった。これら全て事情があって持ち込まれた動物たちで、不思議に仲良く暮らしている。

仏教には放生会(ほうじょうえ)と言って、万物の生命を大切にするという精神と、日頃の殺生に対する供養の気持ちから、魚や鳥などの動物を放してやる儀式がある。寺にあるそのための池を放生池と呼ぶ。

以前やはり捨て猫が本堂に入り込み、ノミをまき散らして駆除に大わらわ。放生地としての妙光寺はもう限界である。

散骨に思う

小川英爾

大山勝君は当時小学校六年生でスポーツ万能、成績も常にトップクラス、弟妹思いの心優しい少年だった。十二月三十一日の夕方、遅くなった大掃除に両親が階下で忙しくしているとき、子供三人二階で遊びに夢中になっていた。そのとき偶然遊び道具にしていたロープが、二段ベッドの上の角と勝君の首にかかり、首吊り状態となつてあつという間に亡くなつてしまつた。両親の落胆は大きく、しばらくした後父親の頭から、ふさふさしていた髪の毛が一本残らず抜け落ちてしまつた程。

七回忌を来年に迎えようというのに、勝君の遺骨はいまだお仏壇の中。お墓に納めたがらない夫に、心配した夫人が相談してきた。ご主人曰く「馬鹿なことと思いでしょうが、命日になるとあの子のお骨が組み合わさつて蘇るような気がするんです。そのときにはあの子の力では墓の中から出て来れないでしょう」と。突然に子供を失つた親の悲しみの深さを知らされた思いだった。

暫くした頃、三十六才の女性が夫と幼ない一人娘を残して胃ガンで亡くなった。夫の郷里の九州で暮らしていたが、病気が見つかつて一時的に新潟の実家に戻り、近くの病院に入院した。実家の両親が孫のめんどうと看病に当り、兄弟も加わつて懸命な看護が続けられた。一時は年の瀬も迫り迫つた稲やかな日、揃つて庭先で餅つきをする光景も見られたが、正月過ぎには再入院、月末には家族の願いもむなしく、幼ない娘を案じながらその短い生涯を閉じた。

九州から駆けつけた婚家の父親との相談でこちらで仮葬儀をし、お骨にしてから九州で改めて本葬儀をすることになり、仮葬儀のために私が呼ばれた。通夜の客も引けたとき、実家の両親が娘の遺骨を少し分骨してこちらに残したいと、婚家の父に申し入れた。しかしその答えは「この人はうちの嫁としていたのだから、例え生家と言えども分骨はさせられない」というものだった。

私も間に入って、「実の娘を亡くした親の気持ちも汲んで欲しい。分骨することは宗教的にも問題はない」と説いたが、聞く耳を持たなかつた。同席する夫はうろたえるばかり。実父は葬儀の日に見苦しいことはしたくないと強

行手段は取れない。

結局私が出棺後に火葬場へ先行、顔見知りの職員に事情を話して、火葬後先に遺骨を一部拾って保管してもらった。義父が九州へ発つまで寺で預かったその分骨された箱に、受取りに来た母親は涙ながらに頼りししていた。

残された家族にとって、愛する身内の死は遺骨をよすがとしていつまでも心に止めておきたいし、できることから生きて返って欲しいと願うのも当然の気持ちであろう。僧侶としてはその思いに共感しながら、一方で『諸行無常、会者定離』の真理を、時間の経過の中で受け止めてもらおうと努めるのが役目と思っている。

ところが近頃、散骨といって遺骨を山や海に撒くことを希望する人が少しづつだが増えているという。法律上も他人に迷惑をかけなければいいとなった。そんなことが広まっては寺の経営が成りたたなくなると言った僧侶もいた。仏教では散骨を否定してはいない。元来が亡き人の骨を拜むのではなく、魂を拜むのだから、散骨も当人と遺族が望むならば問題はないし、後々の供養も位牌があればことは足りる。

ただししかしその前に、散骨を望む人達の気持ちの中に、墓地が入手しにくい、高い、わずらわしい、守り手がいない、といった墓の形式や制度を目の敵にして、だから散骨、といったふうに安直に考えてはいないだろうか。実は日本の寺が今のように葬式中心になったのは、江戸時代に檀家制度ができてから。一般庶民が墓を持つようになった歴史も浅い。まして現在のような先祖代々の墓の形も明治時代の終わり頃からのこと。それまではせいぜい夫婦ごとの小さな墓だった。近頃言ううり、つばな墓というのは実は故人のためというより、むしろ生きている人のためという感がある。だから方角だとか、墓相だとか言っただけでやたら形にこだわる人が出てきたりする。散骨がいいから墓はいらないと言う人も、りつばな墓が欲しいという人も、実は両方とも形や形式にこだわりすぎているのではないか。

供養とは故人を忘れずなつかしむという気持ちになにより大切である。ところが忙し過ぎる現代社会、故人と残された人の心の結びつきが薄れているように思える。いや生きている同志でもどこまで心が通っているか、という時代である。

散骨する人達を紹介するテレビを見たとき、実はその中の大方の人が分骨してお墓にも納めていたのが私には見とれた。

私自身はと言えば、残された家族の意向が第一。しいて言えば墓にこだわるつもりはないが、やはり散骨は気が進まない。大きな墓もいらぬから安穩廟の一区画に納めてもらうことを考えている。その前に今の毎日を僧侶としての役目を少しでも果せるよう専心したい、というのはカッコよすぎるか。

世話人四十八年

池田 昭次 さん(64才)

池田さんは十二才の頃から、信仰熱心だった祖父母の言いつけで、祖母の作ったワラ草履や、家族で作った茅葺き屋根補修用の雑縄を、寺に馬車で運んだりしてきた。というのも祖父が世話人を務めており、昭和十七年に池田さんが十三才のとき父が癌で死亡、その三カ月後に長男が新婚の妻を残して出征、次男も病弱で入院中と、三男の池田さんが祖父と二人で家のことに当たらねばならなかったから。

十九年二月、大雪で寺の本堂の屋根の一部が崩壊した。その春、修理用の杉材を山から切り出すため、各地区から檀家が普請に出た。祖父に代わり大人に混じって出た池田さん、作業は大変だったが、そのときの昼食の、沢の水に山の蕨を入れて作った味噌汁の味が今だに忘れられないという。

その祖父が二十年に死亡、同じ年出

征中の長男が戦死、二十三年に祖母が、二十五年には病弱だった次男が逝った。祖父亡き後、その全てが弱冠十六才の池田さんに全てかかっていた。

戦後の混乱期、農作業も大変で、通っていた高等小学校へは三日に一回行けばいい方だった。世話人も祖父の後を十六才から務め、忙しくて寺の手伝いはできなかったが、会議には必ず出席して、地区の檀家のとりまとめは欠かさなかった。

十九才のとき戦死した兄の妻だったツギさんと結婚、俗に言うオジ直りである。以来母と三人で力を合せて、田んぼと大根、葉煙草、西瓜の畑作に頑張ってきた。母も三十八年に亡くなった。余裕がでてきたのはこの十年余り、これまであらゆる苦勞をしてきたから、この先多少のことがあっても平気だ、と明るく語る。



現在、赤塚駅前開発整備事業組合の監事を務めるなど、バリバリ仕事をこなす行動派として地区の人達に信頼されている。また寺の世話人会議ではいつも先を見通したピリッとした発言で一目置かれる。家業の方も息子夫婦を加えて堅実な農家として知られ、来春には孫が農業高校を終える。

ツギさんと二人、仏壇参りを欠かさない毎日。酒を好まない分お茶と農閑期の一、二月、連日パチンコに通うのを楽しみにしている。



冷夏のお盆

今年の夏は連日の雨で浜茶屋の人、農家の人、皆さん大変でした。聞くところでは西蒲原一帯の米の収量は、他の所に比べてまだいい方とのこと。中には平年作という人もいるようです。しかし全般的に不景気でもあり、樂觀的にはなれません。

そんな夏の八月一日の墓参り、時折り雨のおちる夏とは思えない天気でしたが、日曜日ということでも実にたくさんの方達がお参りに出られました。午前十時頃には墓地が祭りの人込みのようです。駐車場も満杯で外の道路に車の列ができる程。皆さん口々にすごい人だねと。静かな寺もいいですが、やはり活気のある寺の方がもっといいと思います。

お盆

この日安穩廟二ノ廟の開眼法要を営みました。完成した三十八区画中、十月現在で二十五区画決っています。

八月一日を迎える準備で一週間前から墓地清掃を予定していましたが、直前になってアテにしていた人達から、忙しくて行けないと断られてしまいました。大慌てで出入りの庭師から苦勞して、別口を手配してもらいどうにか確保、予算オーバーしてかろうじて一日に間に合った次第。それでも山の上の墓地は嫌がられ、庭師の人達からやってもらいました。

仲々こころした地味できつい仕事は人手が集まらず、墓地や境内の維持管理が大変です。そのために管理しやすいよう、①山の上の墓の移転整理を早く

進める、②新規墓地の墓が建てられていない所に薄くコンクリートを張る、ということを考えています。関係者のご理解とご協力を願います。

題目堂の前の墓地までが寺の敷地ですが、この東側に隣接する雑種地四百五十坪を買って欲しいとの申し出が地権者からありました。隣接地でしかも破格の金額ということで、九月二十五日に緊急世話人会議を開催し協議いたしました。

しかし安いとは言え千数百万円の金の工面がつかないし、この不景気に土地を買う目的で檀家に寄附をお願いする訳にはいかないとのこと、お断りいたしました。この先妙光寺にとって小は題目堂水屋の修復から、大は老旧化した本堂の再建まで、頭の痛い難問が山積みなことを改めて再認識させられたことでもありました。

「フェスティバル安穩」報告

安穩廟の合同供養と交流の第四回フェスティバル安穩が、八月二十一、二日開かれ、会員三十名、一般の方との合計で百六十名という盛会でした。

事前に朝日新聞と地元新潟日報で紹介されたことで、県内始め関東、関西からも多くの参加者がありました。住職が何度か講演で伺った山形県飯豊町からは、町のマイクロバスで十七名が日帰りで参加されました。

一日目、基調講演では山折哲雄先生が、古来日本人は死者の魂が山に登ると考えてきたという靈魂観の歴史、偶然にも九百年前に安養廟という安穩廟と同じような墓が比叡山にあったというお話、そして現代の葬儀と墓についての考え方等々、山折節とも言えるソフトな語りで聴衆を引きつけました。シンポジウムでは全参加者からアンケート形式で、質問、意見を出してい

ただき、まとめた表を見ながら六人の助言者が発言、さらに会場からも発言があつて、と活発な雰囲気でした。

夕方会場をかがり火と奉納いただいた百二十本の大ローソクが燃える安穩廟に移し、法要が始まりましたが、そのときには近所の人も加わり、二百名近い人出になりました。出仕は地元と、遠くは大分、鎌倉、東京、宮城から集まった住職の友人の僧侶八名、それに角田浜講中の十名。音楽に巻町のアマチュアの太鼓のグループ「鼓無双(こむそう)」十二名が勇壮な音を、同じ巻町の琴の教室「佐藤扇葉社中」二十名がおちついた調べを奏でてくれました。

雨ばかりの今年の夏、当日も大変心配しましたが、法要開始ともに雲間から光が差し込み、読経と太鼓と琴の音が一体となった、五十分間のおごそかな安穩法会でした。

夜の懇親パーティーに七十名が参加、宿舎も一つで足りず二次会から二カ所に分れて深夜まで続きました。翌日は残った五十名程が、車座になって前日残された話題について語り合いました。印象に残った話題として、寺のあり方といった一般論を別にすると、もつと仏教を知る場が欲しい、自分の葬儀に色々と不安があるといったことがありました。ぜひまた来年もという声が大半でした。金利低下で運営も大変、皆様のローソク献灯に心より御礼申し上げます。(法要のビデオ送料込二千元)



十年目の

.....

宝ものと言ってしまえばおおげさだが、三十センチのアボガドの木がある。食べ終わったあとこの種をコップに入れ、芽を待つ事四ヶ月、水が腐ったり汚らしくなったりを繰り返して、あきらめかけていた矢先に小さな芽をみつけた。土におろしたら元気に育って、はじめアボガドの葉を見た。南の国の食べ物で、マグロのトロに似た味がするの。山葵醤油で食べることが多い。刺身もどきで酒のつまみにも良く、最近は円高のおかげかずいぶん安く買えるようになった。熱帯の植物というのと、長い時間あきらめなかつた事がいとおしく、大事にしている。

実はこの十月は私たちの結婚十周年だった。結婚記念日などいつもは忘れ

ているのに、十年は節目としてそれなりに祝いたいと思っていた。その日曜日、めずらしいことに、法事に出かけた住職が戻って来た。どうしたのかと聞いたら、日にちを間違えていたという。それならばと珍しく家族そろって義母の入院する病院へ行き、帰りには焼き肉屋で食事することになった。巻でただ一軒のこの焼き肉屋は檀家さんだ。なかに入ると別の檀家さんが食事中で、住職がビールをご馳走になった。そしてふと口から出てしまった結婚記念日という言葉のために、その日の食事代は心優しきお店のご主人からのプレゼントとなってしまった。結婚記念日のお祝いなんて初めてだが、お二人とも檀家だというのが嬉しくも

あり、ただただ恐縮の限りだった。こうして妙に(出来すぎた)記念日が終わった。忘れられないだろうと思う。

私の結婚も十年の間には腐りかけた時も、栄養はたっぷり(？)だったが、しおれかけた時も教えきれない。でもここまでやって来れたのは、ある日ひょっこりと芽を出したアボガドのように、予期せぬ贈り物のように、心が波立ったり、しあわせの実感があつたりしたからだ。これもひょっとして仏さまのおかげかしら、などと神妙な気持ちになるのも、この人と結婚したからだと思うと、まんざら悪くもないなとしみじみ感じ入っている次第である。

小川なぎさ



行事案内

御会式(おえしき) 十一月十二日(金)

例年十月中に営んでおります日蓮聖人の御命日の法要を、来る十一月十二日にいたします。今年は法要後に、不景氣風を笑って吹き飛ばそうと、落語を計画しました。

数年前に身延山参りの『鰻沢』を入船亭扇橋さんにお願ひしましたが、今回は江戸は杉並堀ノ内の妙法寺参りで有名な『堀ノ内』を、桂歌丸さんの弟子で柱歌助さんにお願ひしました。いながらにして堀ノ内の妙法寺にお参りした気分にもなれます。

左記要領です。準備の都合上十一月九日までに、各地区世話人か妙光寺へお申し込み願ひます。檀家に限りませんので、お誘い合わせ多数ご参詣下さい。尚当日若干多めに用意しますので、九日以降当日でも参加できるようにしましたら、妙光寺へ電話連絡の上お出かけ下さい。

記

日時 十一月十二日(金) 午前十一時〜午後二時半頃

会費 一人 三千円(含おとぎ料)

その他○来年度の「岩屋七面様のぼり旗」奉納受付中。一本三千円、五十本限。

○日蓮宗新聞購読いただいている方は代金二千八百円お願ひします。

あとがき

前の号で煙草を再開と書いて、幾人かの方に心配のお手紙までいただきました。八月一日をもって再禁煙いたしました。というのも六月の人間ドックで要再検査となり、七月末の胃カメラで初期胃癌の疑いとなりました。ショックも受けましたし、もし入院手術となつてはお盆も、フェスティバル安穩も人に頼まなくてはと、近い人達に日程の調整まで相談しました。一週間後結果は胃カイヨウの跡でとりあえずは心配なしとのこと。以来再禁煙、近頃は四キロも太ってしまいました。お騒がせしてすみませんでした。

九月発行予定が大幅に遅れ恐縮です。次回は早目に準備して十二月早々にはと思っておりますが……。ではまた。

(小川 記)

